

会 議 録

1 会議名

平成30年第2回上越市青少年健全育成センター運営協議会

2 議事（公開・非公開の別）

- (1) 青少年健全育成センター事業の進捗状況（4月～9月）（公開）
- (2) 若者支援事業の進捗状況（公開）
- (3) 情報交換（公開）
- (4) その他（公開）

3 開催日時

平成30年10月18日（木）午後2時から3時30分まで

4 開催場所

上越市教育プラザ 研修棟中会議室

5 傍聴人の数

2人

6 非公開の理由

なし

7 出席した者（傍聴人を除く）氏名（敬称略）

- ・ 委 員：飯塚裕、小松敦、竹内正弘、井部佐恵子、山本条太郎、藤井清比古、
古川美也子、岩片喜代子、鈴木真理子、大堀みき、吉岡智宣
- ・ 事務局：上越市教育委員会社会教育課長 小池兼一郎
上越市青少年健全育成センター 山崎光隆所長、曾我茂樹指導員

8 発言の内容

《 議 事 》

- (1) 青少年健全育成センター事業の進捗状況（4月～9月）（公開）

※事務局より説明（資料 P1～P13）

大堀委員：カラオケは子どもたちだけで利用できるのか。

事 務 局：小中学生については基本的には子どもたちだけでは利用せず、保護者、大人と一緒に利用することが基本になっていると思う。高校生になると子どもたち同士での利用が可能である。

大堀委員：街頭指導の8月、9月のところで、「カラオケに中高生が多くなっている。

店では中学生に6時に帰るように指導している。」とあるが、中学生同士で行っているということなのか。

事務局：そういうケースもあったと考えられる。

藤井委員：8月9月の街頭指導が倍近く多くなっているがこれはどうしてか。

事務局：青色灯パトロール車による特別街頭指導を実施したためである。

(2) 若者支援事業の進捗状況（公開）

※事務局より説明（資料 P14～P15）

吉岡委員：14ページの2番で月別の相談数は延べという発言があったが、③については実数なのか延べ数なのか。

事務局：実数である。

藤井委員：今、話のあった相談件数について。これは春の計画段階の予想と比べて多くなっているのか、それとも少なくなっているのか。

事務局：計画を立てた昨年度の段階で、向う5年間でどれくらいの数字にまでもって行きたいかを考えた。昨年は30件くらいまでを見込んだが18件であった。今年目標は60件であるが、今現在、延べ相談数が35件ほどになってきている。これから後半にかけて進路等に関する相談があることが見込まれるので最終的には60件近い数字になるのではないかと思う。啓発を始めて2年目の目標相談件数は60件である。

藤井委員：もし、予想より少ないということになると計画の見直しも必要と考えたが、今のところ当初の計画どおりに進行していると考えてよいか。

事務局：ほぼ当初の目標に向かって進行しつつあると考えている。

藤井委員：もし、もっと増やすとしたらどんな手立てがあるか考えるか。

事務局：我々だけで相談を受けるという形には限度がある。同じような活動をしている方々とネットワークを作ることが必要であり、それぞれの活動をお互いに分担し合っていく必要がある。当センターでは、11月23日に若者支援フォーラムを開催する予定である。そこでは市内の若者支援に取り組んでいる団体に集まってもらう。また、ひきこもりを理解するための講師を招いて講演会を開くなど広く訴えかけていきたいと考えている。そういった活動をとおして啓発を進め、今まで声をあげにくかった人が声をあげ、

いろいろなところにつながってくればよいと思う。また、単に当センターの相談件数が増えるというだけではなく、いろいろな支援の機会が増えていくことが大切であるとする。親の会も当初3回の予定だったが、要望もあり、今後5回まで開催する予定である。

事務局：若者育成支援については29年度から力を入れ始めた。昨年蒔いた種が今年少し芽を出してきたというところである。相談する場所も、決まった場所がなく会議室等を借りながら相談をしている状況である。もう少し落ち着いて相談できる場所をつくるために、庁内等で場所を探しているところである。件数については本来少ない方が良いわけだが、眠っている件数もあり、その中にはなかなか出て来づらい方もいる。それに対して少しでも力になれるよう広報、周知に努めるとともに、ネットワークを使いながら支援の厚みを増していきたいと考えている。

藤井委員：高校生の中には他市在住の生徒もいるわけだが、学校の仲間との関係でそういう生徒が相談に来るということは考えられないか。他市在住の生徒にも対応するのか。

事務局：市内の高校に市外から通っている生徒についてもシャットアウトするのではなく、他の生徒と同じように対応したいと考えている。例えば「親の会」のパンフレットには「市外在住の方も参加できます」と記載してある。相談についても同様である。基本は市内在住の方を対象にしているが、そこで線を引かずに市外の方の相談にも応じる考えである。

(3) 情報交換（公開）

※各委員からの情報提供及び青少年健全育成センター事業についての意見等を求めた。

○飯塚委員（上越市小学校長会）

県の小学校長会では自殺予防に対する統一した指導を行うために文書が配られた。この10月が県のいじめ根絶月間であることから、共通した内容で子どもや家庭、地域に呼びかけることになっている。特にネットいじめについて小学校でも力を入れて指導していこうと重点項目になっている。次に、ひきこもりについて、ひきこもりとなった家庭では、他とつながるネットワークが無く、情報が無いまま困っているのではないか。いろいろな若者を支援する会ができ、今後ネットワークが

できてくるのだと思うが、そういったネットワークが非常に大事だと感じた。

○小松委員（上越市中学校長会）

市内中学校は問題の報告もなく、全体に落ち着いてきている感じがある。そのような中で、どこの学校でも子どものコミュニケーション力に課題があり、その育成に力を入れている。当校の子どもたちも1小・1中学校の環境の中で、あまり言葉を発しなくても思いが伝わる関係の中で育っている。ところが高校に進学したり違った環境の中に入ったりしたときに、なかなか自分の思いが伝えられない。そこを私たちは何とかしようと力を入れて取り組んでいる。

○竹内委員（上越地区高等学校長協会）

現在の県高等学校教育における最大の課題はいじめの防止と自殺の予防である。一昨日も臨時校長会があり、万が一の事態、最悪の事態を想定して組織的に動くことが確認された。また、いじめの総点検として校内体制の見直しを行っており、県の担当者が全県立高校をまわり点検をしている。今日の報告にもあったが、上越地区でも中途退学者等が少なからずいる。4月からやっとスクールカウンセラーが配置され、1週間に4時間各学校に来て相談ができるようになっていく。

学校組織は小中高大さらには職場まで含めて、ある意味で分断されるわけである。それに対して、こういった情報交換の場や親の会のように垣根を超えるような組織や活動は必要である。先ほど相談人数の話がでたが、個人的には数が多い少ないよりも、息の長い継続した取組が大事で、誰でもが必要な時に足を向けると、そこに誰かがいるという状況を続けていくことが大事であると考えている。

○井部委員（上越市民生委員・児童委員協議会連合会）

地域と子どもたちの関わりが少ないという話がでたが、柿崎地区では地域と子どもたちとみんな朝挨拶をしようという活動をしていて、うまくいっているように思う。ひきこもりの話がでたが、私の担当している地域にもひきもりというか職につかないでいる人がいる。何とか社会に出てほしいという家族の気持ちがありいろいろ話をするが、なかなか勤めに出ていけないでいる。この場合どうしたらよいかと考えているところである。

○山本委員（上越警察署）

非行少年、不良行為少年の現状は、昨年と比較して減少している。非行少年で多いのは窃盗、万引きである。また、大人の犯罪も含めて最近増えてきたのは盗

撮である。先ほど話のあったバイクについて、春日山駅や金谷山の駐車場でたむろしている少年がいるが、そこに行って声をかければ反抗するようなことはなく、素直に応じて退散するという状況である。これからも継続して見守っていきたいと考えている。

○古川委員（上越市小中学校PTA連絡協議会）

8月24日25日に日本PTAの全国大会を新潟県で開催し、上越では「PTAの組織運営」というテーマで行った。当方でテーマとしてあげたのは「PTA活動における地域との連携」であり、これをもとに講演会、パネルディスカッション、実践発表等を行った。多くの方に参加していただき大好評を得て終わらせることができた。この成果を踏まえて今後の活動につなげていきたい。

○鈴木委員（上越市教育センター）

青少年健全育成センターで今年度面談の数が増えてきている中で、当教育センターの相談室等を貸し出して使ってもらったこともあった。今後人数が増えてくる見込みの中で、来た方が安心して面談ができ、継続した相談ができる場所の確保が急務であると考えます。「親の会」の話の中で、他市町村の子どもや親も受け入れるという話があったが、ネットワークを生かして本来の地元の関係機関等にもつないでいくことができればよいのではないかと感じた。スクールソーシャルワーカーとして、小中学生の子どもたちをいろいろな人や制度とつなぐ仕事をしている。時々話題になるのは中学校を卒業した後の高校とのつながりが不十分であるというケースである。今後は、高校への十分な情報提供や対応についてのつながりを、新年度に向け行っていきたい。

○大堀委員（公募委員）

地域の夏祭りで小学生やそれ以下の子どもたちは楽しく参加しているが、中学生の姿はぱったりと見られなくなる。よくよく話を聞いてみると学校の活動が忙しくて、地域の活動まで手が届かないという状況があるようだ。さらにそれ以降の高校生になるとまったく地域とは関係がなくなるという感じである。これに対して、もう少し昔ながらのつながりを大事にできる環境になればよいと考える。また、先ほど「親の会」の話があったが、親に少しでもゆとりが出てくれば子どもへの接し方も変わってくると思うので、さらに親への支援の手を差し伸べてもらいたい。

○吉岡委員（公募委員）

若者のひきこもりの話がある一方で、最近よく耳にするものに80・50問題がある。親が80歳、子が50歳という高齢化の問題が出てきている。ひきこもりは状態に過ぎないので、その背景、その中身が何なのかについて精査して対応や支援の方向を考え進めていく必要がある。実際にひきこもりで50歳になった方も多くいるのが現状だと思う。すべてが働くことにつながらなくても、社会参加につながる支援ができるような仕組み作りを進めていかなければならないと思いつている。

○岩片委員（上越市青少年健全育成委員協議会）

育成委員として青色パトロールや街頭指導に加わっている。一層目を向けて子どもたちを見守りたいと思う。

○藤井委員（上越市地域青少年育成会議協議会）

10月13日に「まちづくりワークショップを開催」した。昨年までは「中学生まちづくりワークショップ」という名称で行っていた。先ほど地域と子どもたちとのつながりが希薄だという話があったが、そういった意味もあり今年も名称を変更して実施した。しかし、残念ながら今年の発表は昨年度と同じような内容だった。中学校3年生を中心とした地域貢献活動の学習発表的な内容に終わってしまった。一つには学校に居る子どもだけの活動になっており、地域が直接関わった姿が発表の中に見えてこない。メインは中学生であっても、活動の中で大人や小学生も含めて地域の人々がどう関わったのか、その部分だけを取り出して考えなくてはならない。また、大事なことは中学生が卒業後、地域の活動にどう関わって行くかである。高校生になっても、さらにその後も続けて活動に関わってもらえるような地域、そんな姿を夢見ている。そういう方向で、地域と子どもたちのつながりについて真剣に考えて取り組んで行きたいと思う。

（質疑）

岩片委員：山本委員にお聞きしたい。先般安全メールで痴漢が多発しているとうメールが入ってきたが、どのような状況なのか教えていただきたい。

山本委員：多発ではない。直江津地区における2件である。

(4) その他

事務局：今後センターでは「若者支援フォーラム」「ユースアドバイザー養成講座」

「第3回親の会」を予定している。第3回会議は2月15日（金）に開催する予定である。内容は今年度の運営の総括と31年度の方針等となる。

9 問合せ先

上越市青少年健全育成センター TEL：025-544-4690

10 その他

別添の会議資料も併せてご覧ください。